

日本セラミックス協会 第33回秋季シンポジウム (2020年) 参加報告

AGC(株) 材料融合研究所

赤塚 公章

Report on the 33rd Autumn Symposium of the Ceramic Society of Japan (2020)

Kosho Akatsuka

Materials Integration Laboratories, AGC Inc.

読者の方々もご存じの通り、2020年9月2日(水)～4日(金)に開催された今年の日本セラミックス協会第33回秋季シンポジウム(2020年)は、新型コロナウイルスの影響で初のオンライン開催となった。筆者は初のオンライン学会参加ということで、「ちゃんと聴講できるかな…」、「質問はどうすればよいのだろうか」など、どのようになるかと緊張した。と言っても、今回は聴講だけであった筆者など、開催者や発表者に比べると、その緊張は取るに足らないものだったと思う…。

まず、最初に初のオンライン学会を無事に、かつ、円滑に運営して下さった主催者の公益財団法人セラミックス協会、行事企画委員会、秋季シンポジウム小委員会、開催地実行委員会、オーガナイザー、座長の皆様など、運営に関わ



写真：筆者が自宅でオンライン学会を聴講している様子

った全ての皆様に御礼申し上げます。個人的な感想としては、初めてのオンライン学会とは思えないくらい、(筆者が聴講したセッションでは)トラブルが無く、質疑応答も活発に行われ盛況であり、大成功だったのではないかと感じた。これは、運営に携わった方々の努力の賜物であると思う。

それでは、オンライン学会がどのようなものであったか、また、どのように感じたかを報告

〒230-0045

神奈川県横浜市鶴見区末広町1-1

TEL 050-9014-1945

E-mail: kosho.akatsuka@agc.com

する。

会場は15、セッション数は18、各講演は9時から始まり18時まで並列で行われ、試写室や休憩室なども設けられ、いつもの秋季シンポジウムと同様の形式で違和感がなかった。一言でいうと、「オンラインで行われている学会をそのままオンラインに移行した。」と言う表現がぴったり当てはまると思う。一言で書いてしまうと簡単に思えてしまうが、このように違和感を与えないサイトの作り、運営を行うために、膨大な時間やアイデアを詰め込んで作り上げたのだと思うと、改めて運営に携わった方々にお礼を申し上げたい。違和感があるとすれば、会場がないため、どれくらいの参加者数があるか、どのような方々が来られているかを、ぱっと目で判断することができないことくらいであった。

また、懇親会がオンラインというのは斬新であった。(ただ、筆者のPCではオンライン懇親会で利用されたWeb会議システムRemoが使用できず、残念ながら参加できなかった…。)

講演は、主にZoomビデオコミュニケーション社のZoomとCisco社のWebexシステムで行われ、セッションごとに入口が用意されており、迷わずに会場に入ることができるようになっていた。会場に入ると、座長、発表者の名前はもちろんのこと、そのセッションの参加者の名前と所属も一覧で分かるシステムである。オンラインの学会会場の場合、誰が聴講しているかは、知っている人であれば分かるが、それ以外は分からないことが多い。しかしながら、上述のように参加者の名前と所属が一目で分かるので、どのような方々が興味を持って聴講しているかが、良くも悪くも瞬時に分かってしまう。一企業の研究員としては、常に競合他社がどこに興味を持って聴講しているか分かる反面、自身も相手に弊社がどこに興味を持って聴講しているか、バレてしまうリスクを感じた。もちろん、名前と所属を隠して入室することも可能だが、フェアではないと思い、筆者は思いっきり名前と所属を記載して聴講した。入室すると各

会場の参加者は、バラつきがあるものの1会場あたり30～60人程度は参加していて、オンラインで行う講演と変わらないと思った。また、100人を超える大盛況の招待講演もあった。このような講演だと、通常であれば会場に入りきれなかったり、後ろで立ち見であったりして、良く見えないこともあるが、オンラインだと座ってディスプレイで講演内容をきちんと見られて、机の上でメモもでき、非常に良かった。

上述のようにオンライン開催であるため、会場の雰囲気や執筆できない。そこで、本稿では本学会がオンライン開催であったが故に、筆者が特に感じたメリット、デメリットを、それぞれ3点記述したいと思う。

・オンライン学会のメリット

①時間的な制約が少ない

現地までの移動時間はもちろん、職場、自宅など聴講場所を選ばないことはメリットが大きい。

②会場移動がスムーズで移動が瞬時

会場移動が瞬時にできるため、違う会場の講演を続けて聞くのが容易である。

③プライベートチャット機能で即座に連絡が可能

メールアドレスや電話番号など連絡先が分からない方でも、同じセッションに入室していれば、プライベートチャット機能で即座に連絡が可能であった。

また、余談だが筆者が間違った会場に入り、目的の会場に入り直した時に気が付いたことがある。2会場違うデバイスから入室して、同時に2セッション聴講している方がおり驚いた。最初、「ん?!」と思ったが、参加者リストをよく見ると、「○○のiPhone」とお名前がなっていたため、2台のデバイスで聴講していることが分かった。オンラインだからこそ可能なことだが、果たして2セッション同時に理解できるかは疑問に思った次第である。

・オンライン学会のデメリット

①新たな人脈をつくりにくい

メリットのところ、プライベートチャット機能で即座に連絡が可能と記述したが、実際は、知らない方には声を掛けにくいことが分かった。オンサイトであれば、興味を持った講演者に直接声を掛けさせて頂いたり、知り合いを通じて新たな人脈形成ができるが、オンラインだとこれが難しいと感じた。

②会場の雰囲気が分からない

会場の雰囲気が分からないので、講演者や参加者に声を掛けて良いものなのか迷った。また、質疑応答時間以外に質問がしにくいとも感じた。

③発表内容の録画やコピー等の問題

オンライン学会では最も課題となることで、聴講者1人1人のモラルに関わる場所である。「発表内容の録画やコピー等は、協会としては禁止のアナウンスをいたしますが、外部機器を使用した録画までを考慮すると現在のところこれを防止する手立てがないため、この点を考慮の上、発表内容を構成するようお願い申し上げます。」と学会のサイトに記述があり、座長の方々もセッションごとに毎回きちんとアナウンスされていたが、現地開催と比較すると発表内容の録画やコピー等は、比較にならないほど簡単であり、また悪用されかねない。この問題は学会サイトで記述している通り、完全に防ぐことは難しいと察するとともに、今後は知的財産での保護や論文投稿を行ってからの学会発表という流れが一層加速すると考えられる。企業や国立研究所においては、このような流れが一般的であると

思うが、研究以外に教育を担っている大学などの教育機関では、知的財産構築に掛かる時間、手間、費用などを考えると難しい面もあると思う。そのため、今後、新奇アイデアの宝庫である教育機関からの発表が控えられてしまうことがないようにするためにも、研究者1人1人の研究者倫理を今まで以上に意識し、大事にする必要があると感じた。筆者が本稿で一番書きたかったことである。

さいごに

オンライン学科はメリットもデメリットもあるが、今後も活用されていくのではないと思う。特に場所による制約で参加できない方々には、オンラインによるメリットは大きいと感じた。上述したが、メリットもデメリットも兼ね備えているため、オンライン、オンサイトの両方で同時開催され、どちらでも参加できるような会議システムができることを願う。

このニューガラス関連学会のコーナーでは、会場の雰囲気を撮影し掲載することが多いが、今回はオンサイトの会場が存在しなかったため、本稿で掲載できないことは誠に残念である。また、何か1枚でも写真を掲載しようと考えた結果、筆者が自宅でオンライン学会を聴講している姿しかなかったことを、ご了承願いたい。

筆者としては、もうひとつ残念なことがある。現地開催だと、地場の美味しい料理など楽しめるが、オンラインだとその楽しみが無くなってしまったことである。今回は北海道大学ということで、札幌に行くのを楽しみにしていたという参加者も多かったのではないだろうか。筆者もその1人であったことは言うまでもない…。